

わっふる・うーん

「…で、何でこんな事になってるわけ？」

気の強そうな少女の声が、薄暗い通路に響いた。

その声の主は、青く長い髪をツインテールにまとめ、エプロンドレスに身を包んだ少女——さくらである。さくらは、ご機嫌斜めな様子で隣に立つ二人の少女に目を向ける。

「私にも分かんないよ」

困った表情でそう答えたのは、青い髪のショートカットが良く似合う少女——御影さくらだった。

その様子から察するに、彼女も、今自分が置かれている状況に思いつき戸惑っているように見える。

「ここはどこなんでしようね」

ちょっとだけ肌が多く見えるワンピースと腕に付けたバンダナが印象的な少女——双葉がのんびりと呟く。

三人の少女達は、それぞれ周りを見渡した後、同じように首を傾げた。

それもそのはず、彼女達は石で作られた薄暗い通路、いわゆるダンジョンの真っ只中にいたのだった。

彼女達が立っている場所は、延々と続く長い通路の途中らしく、前後には薄暗い道が遥か先まで続いている。

「あたしの記憶が正しいなら、あたし達は、お花見に行く途中だったはずなんです」

そう言いながら、さくらは石造りの壁に背を預け、腕を組む。どうやら、宴会に行く途中に邪魔されたのが気に入らないらしく、その表情は不機嫌そのものだ。

「川沿いの道を三人で走っていたんだよね？」

御影さくらは、少し考え込む様子を見せながら、両手の指を胸の前で軽く合わせる。デスクトップでも良く見られるが、その仕草は御影さくらの癖の一つなのだ。

「もう少して会場に着くという所で…何が起きたんですって？」

うーん…と、双葉は人差し指を頭に当て、ついさっきの出来事を思い出してみた——。

集合時間に遅れていたさくら、双葉、御影さくらの三人は、お花見の会場である桜並木に向かって、川沿いの道を全力でダッシュしていた。

先頭を切って走っているのは、さくらである。裾の長いエプロンドレスという、三人の中では一番動きづらい服はすなのに、小柄な体に似合わないパワフルな走りでの二人をリードしている。運動能力という点で、そんなに差が無いはずの二人が後れを取っているのには、それなりの理由があった。

御影さくらと双葉の服は、スリットが入っていたり、スカートの丈が少し短かったりと、さくらの服に比べて動きやすい作りになっている反面、激しい動きには向いていないのである。時折吹く強い春風に、何度もスカートをめくられた事もあって、二人はスカートの裾を気にしつつ全力で走るといふ無茶を強いられていたのだった。周りに誰も居なさそうとはいえ、流石にはんつ全開で走れる程、恥じらいを捨てて走る事は出来そうにない。

「はあ…はあ…。ね、姉さん、少し休みましょう…」

ペース配分も何も無い全力ダッシュの連続に、既に限界が来ていた双葉が苦しげに呻く。

「却下」

先を走るさくらは、双葉の提案をあっさりと否決した。どうやら、何かの世界は民主主義ではないらしい。

「もう…走れませんか…」

とつとつ双葉は、崩れるようにして、その場にしゃがみこむ。

「ほら、もう少しだから頑張って。デフォルトゴースト全員が遅刻じゃカッコ悪いでしょうが」

戻ってきたさくらが、双葉の腕を取って無理に立たせようとするものの、双葉は顔を左右に振り、抵抗する。

「はい、そこまで」

流石に見かねたのか、御影さくらは強引に双葉とさくらを引き離すと、双葉を地面に座らせた。自らも隣に座り、双葉の顔を伺いながら、心配そうに声を掛ける。

「大丈夫？」

「ええ、少し休めば大丈夫だと思います…」

双葉は少し安心したのか、表情を和らげた。

「どうせ間に合わないんだから、少し休んでもいいんじゃない？」

御影さくらがさくらに向かって提案する。御影さくらにしても、汗だくのまま会場に着きたくは無かった。出来れば、残りくらはゆっくり歩いて、汗を引かせたい。

双葉の様子を見て、さすがに悪かったと思ったのか、さくらも隣に座り、双葉に声を掛ける。

「ごめん、双葉。ちょっとやり過ぎた。少し休んでから一緒に行くか」

時に暴走はするものの、謝るべき時は素直に謝るのがさくらのいい所である。そんなさくらの様子を見て、双葉もにっこりと笑顔を浮かべて頷いた。

しばらくはのんびりとした時間が過ぎる…と誰もが思ったその時、轟音と共に激しいつむじ風が巻き起こった。つむじ風は、桜の花びらを激しく空中に踊らせつつ、彼女達を一気に包み込む。

「……！ 何これっ？」

明らかに尋常でない状況に、御影さくらが声を上げる。

気が付けば、地面には三人を囲むようにして魔法陣のような模様が浮かび上がっており、淡い光を放ち始めていた。さらに激しくなる強風の中、何のリアクションも出来ないまま、三人は魔法陣から放たれる光に包まれていく。

何が起きているのかも理解出来ないまま、さくら、御影さくら、双葉の三人は、ホワイトアウトしていく視界の中、空中に投げ出されるような感覚を最後に意識を失ったのだった――。

「……という事だったと思います」

「うん、私も覚えてるよ。不思議な魔法陣みたいなのが突然出てきたんだよね」

双葉が語ったこれまでの経緯に対して、御影さくらも頷いた。

「でも、やっぱり何も分からない……か」

片目を瞑ったさくらがそう呟く。

経緯だけは分かったものの、ここが何処なのか、誰の仕業なのかについては全く分からない。どうすれば元の場所に帰れるのかも、全く見当が付かなかった。